東京都江戸東京博物館研究報告　第15号　2009年３月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.15, P.49-58, March, 2009

【論　文】

太田道灌と江戸城

齋　藤　慎　一*

目　次

はじめに
1　太田道灌期の構造
2　城下の様相
3　街道と江戸城
おわりに

キーワード　太田道灌　江戸城　城下　平川　大橋　鎌倉街道

はじめに

徳川将軍家の府として、江戸は飛躍的発展を遂げた。その変化は寒村から大都市へであると、通説として理解されてきた。江戸幕府成立以降の発展は動かしようのない事実である。他方、大きな変化は徳川家の功績をたたえた伝説が加味されており、家康の江戸入城は中世に達成した一定の成果の上に成り立ったものであるとする見解が相次いでいる（岡野友彦〈1999〉・齋藤慎一〈2004〉）。

いわゆる江戸以前には、大きくわけて太田道灌を含む扇谷上杉氏の段階、戦国大名北条氏の段階、そして豊臣大名徳川家康が入封した当時の江戸幕府以前の三段階が想定される。この三段階の相違を明らかにした研究が望まれるところであるが、現時点ではこれらを峻別して歴史像を描くには十分な蓄積があるとは思えない。

中世の江戸と江戸城の研究は菊池山哉（1956）の研究が重要な画期となった。菊池の研究は建築史の分野に大きな影響を与えている。そのような研究状況のなかで鈴木理生（1991）は新しい視野を開いた。研究史はこのような経過を辿るが、当初段階において文献資料はほぼ網羅されており、すでに史料解釈による歴史像の相違が問われる段階になっていた。

このことは研究状況を概観した平野明夫（1989）の研究に示されている。例えば、平野は検討対象とする史料について、龍統と万里は江戸城を実見しているが、対象史料は「道灌の江戸城ひいては道灌その人をたたえるために作られた文学」であり、「必ずしも実像を描写してい

*東京都江戸東京博物館学芸員

るとは限らない」と指摘している点に端的に示されている。

1980年代以降、地域史研究は学際的な研究動向につつまれる。考古学・建築史学など、従前の文献史学のみによる地域史の解明ではなく、さまざまな方法論を駆使しての研究である。江戸もその動向に洩れず、考古学の分野からは東京国立近代美術館遺跡（竹橋門）の調査（東京国立近代美術館遺跡調査委員会1991）ほか、建築史からは玉井哲雄（1986）の研究が投げかけられている。

以上の動向のなかで、中世江戸の研究はいくつかの課題が見え始めている。注目すべき課題として以下を掲げたい。

①地域空間のなかで中世江戸と江戸城を位置づける方向性。

②手薄な後北条期の研究。

③中近世移行期の変遷についての解明。

この問題すべてに即座に対応するだけの用意は現時点ではないが、この３点を踏まえて、太田道灌期を中心に中世江戸と江戸城の再検討を行うのが小稿の課題である。

1　太田道灌期の構造

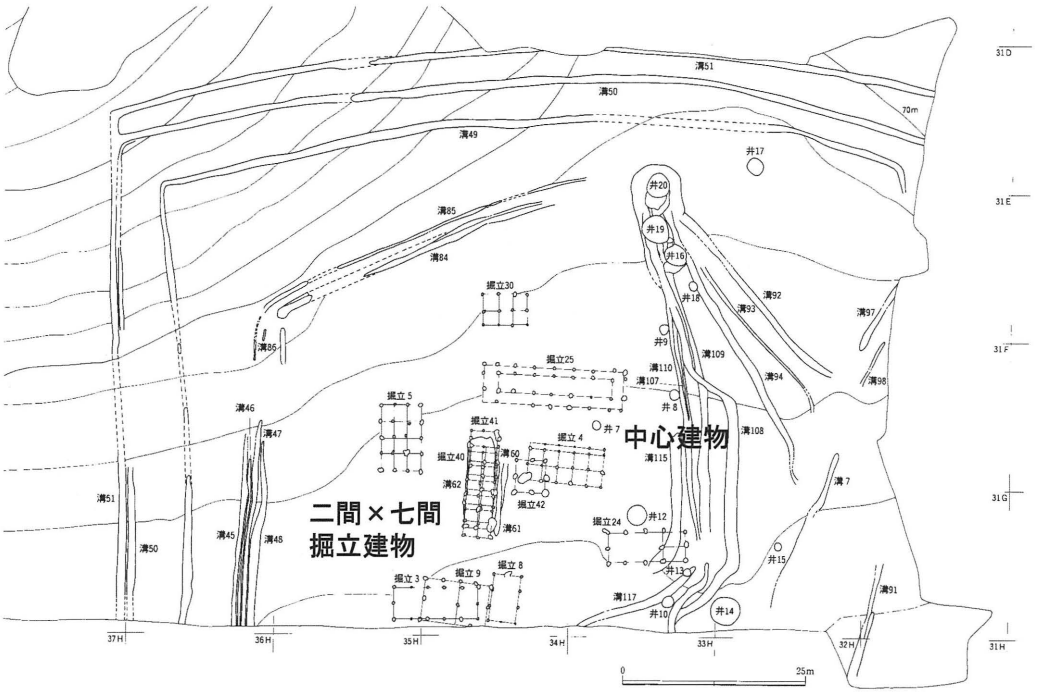
江戸城の起源として重視されるのはやはり太田道灌による築城であろう。太田道灌が江戸城を築いたのは長禄元年（1457）とされ、『赤城神社年代記録』は３月１日、『鎌倉大日記』は４月18日の日付を記している。ともに年代記の記述である。この道灌築城によって江戸の様相は大きく変わることになる。

江戸城内部の様相は「寄題江戸城静勝軒詩序」〔北区史記録四一〕に記載される。同史料によれば、江戸城は基本的な構造としては切岸と塁そして水堀が周囲を廻っており、そのなかに太田道灌の居所があったと記す。日常の空間である「静勝軒」とその背後に構えられた「閣」がある。そして「静勝軒」の側面には「直舎」が建てられていた。そのほかには櫓、番所、倉庫、厩屋などの建物が若干であったと記載する。

この江戸城の様相は近年の考古学調査と比較が可能である。具体的には大久保山遺跡（埼玉県本庄市）である（図１参照）。主殿に想定される２時期の中心建物（掘立４および25）の西側には「直舎」に相当する長細い建物（掘立40および41）が翼のように建てられている。大久保山の場合、この２群を中心に複数の建物群が溝に囲まれている。まさに「江戸城静勝軒詩序並江亭記等写」の様相を重ね合わせることができる。

つまり、太田道灌の江戸城とは鎌倉時代以来の御家人が構えた屋敷に系譜を引く構造であったと評価できることになろう。

しかしすでに注目されているが、江戸城の構造はこの記載だけではない。「梅花無尽蔵」〔北区史記録46〕はさらに広い空間を描写する。その記載によれば、城門の前には市場が設けられ



早稲田大学本庄校地文化財調査室編―『大久保山VI』

図1　大久保山遺跡　ⅢA地区

ていることに加え、塁の構成は子城・中城・外城の三重の構造であった。従前は本丸南端の富士見三重櫓付近を子城にあて、北に向けて台地上を堀切で区画し、中城と外城の空間が連結する連郭式城郭が考えられていた。しかし、記載は三連ではなく三重である。加えて、子城・中城・外城の語彙は東アジアでの都城制で使用される語である。梅花無尽蔵の作者は五山僧の万里集九であることを踏まえれば、方形区画を意識した三重の構成を考えるべきであろう。すなわち三重の区画が堀で仕切られ、門と橋で結ばれていた。

2　城下の様相

道灌当時の江戸の町についても、先の「江戸城静勝軒詩序並江亭記等写」に記載がある。

城の東畔には川が流れており、南の海に注ぐ。河口には高橋が架かっていた。その橋の付近には商船・漁船が繋留され、日々市をなしていた。安房・常陸・信濃・越後・相模・和泉などから物資がもたらされ、人々が集まっていた。詩文中の表現であるので多分に誇張を含んでいるであろうが、先学が指摘するように市の立つ場があったことは間違いない。

この記述のなかでの問題は高橋の場所である。古くは隅田川に架かるとする説があったが、

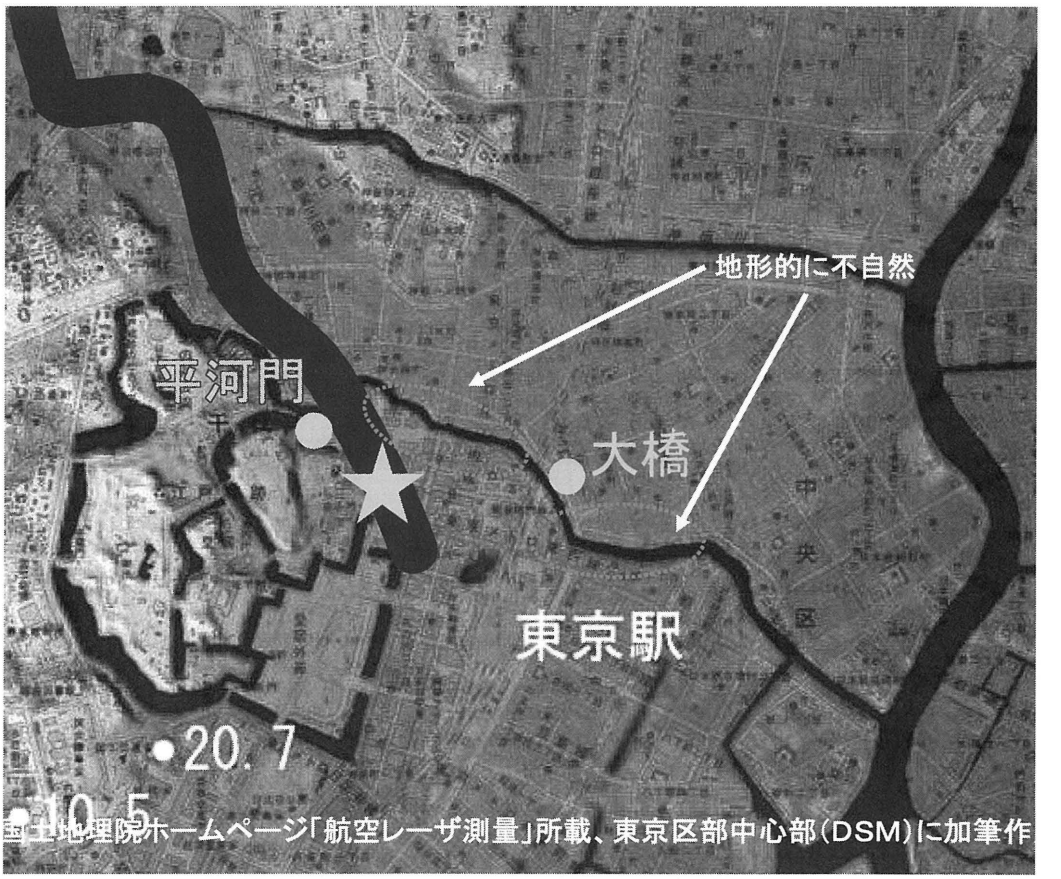


図2　平川の河道

近年では菊池山哉の大橋（常盤橋）説が有力となった。この説は、村井益男（1964）・内藤昌（1966）・小松和博（1985）等の建築史家に支持され、都市空間復元の前提となった。他方、鈴木理生は「大橋は家康期の架橋。平川は日比谷入江に注ぐ。」と述べ、大橋説を否定した。しかし高橋の場所に関する論述はない。この状況を平野（1989）は「高橋の位置については、いくつかの説が提示されているが、この文から読みとることは不可能である」とまとめる。

「梅花無尽蔵」が記載する「城門前設市場」と「江戸城静勝軒詩序並江亭記等写」の景観は一致していると考えられる。すなわち中心的な城下の町場が江戸城の門前にある。そしてこの町とは北条段階にも続く平川の町場と考えられる。地形図を詳細に見ると、常盤橋を通過する河道は神田山の山裾を切り通していることが明らかであり、人為的な河道である（図2参照）。この河道がいつ設定されたかが大きな問題である。平川の町場を城下町の中心とし、江戸城平河門付近が当該地とするならば、町場と橋と河口が一致する叙述であることから、平川の流れは竹橋門から大手門付近で日比谷入り江に注いでいたことになる。「城門前設市場」の記載は重要であろう。とするならば高橋は平川の河口、すなわち城下平川に架けられていたと考える

べきであり、平川南岸の江戸城と北岸の城下町平川を結んでいた街道の橋と考えられる。

いずれにせよ、日比谷入り江に注ぐ平川の河口付近、近世江戸城の平河門外側の一橋付近に太田道灌期の江戸城の城下平川があったと考えたい。

城下の町場には商業空間だけでなく寺社も営まれていたはずである。江戸時代の記録や伝承には、平川より移転した寺社の存在を伝えている。

平河天満宮　とりわけ著名なものは、千代田区平河町に移転している平河天満宮である。同宮は文明10年（1478）6月25日、太田道灌が建立した（北区史二一八）。棟札写の「豊島郡江戸平河城内」の記載はやや読解に苦慮するが、天満宮は平川に建立されたことは読める。また太田道灌を尋ねた万里集九は平川天満宮が「江戸城之北畔」に建っていたと『梅花無尽蔵』に記す。そしてこの場所には梅が数百株ほど栽培されていたことも書きとどめる。この景観が梅林坂の語源となったのだろう。江戸城本丸の上梅林門から二の丸の下梅林門を下るとすぐ三の丸の平河門となり、門外は営団地下鉄竹橋駅に付近に至る。道灌当時の空間構成が今に伝えられたことになる。

吉祥寺（曹洞宗）　平川の東端付近と推測される場所である和田倉には吉祥寺があった。江戸築城の頃、太田道灌が諏訪明神の境内地に建立したと縁起は語る。この付近に諏訪明神があったことも窺える。同寺は第五代古河公方足利義氏の母で北条氏綱娘であった芳春院の位牌寺であり、両家から手厚い保護を受けていた（戦国遺文古河公方九二四ほか）。

平河山法恩寺（日蓮宗）　京都六条本圀寺の直末であった法恩寺も中世には平川にあった。大永4年（1524）には北条氏綱が陣衆不入と諸役停止を認める（北区史二九七）ほか、所領を寄進する（同二九八）。天文17年（1548）には太田康資が所領を寄進している。この時の宛先は「江戸平川法恩寺」となっており、確実に平川に所在したことを示す（北区史356）。

平河山浄土寺（浄土宗）　同寺は文亀3年（1503）創建の伝承がある。

善龍山楞厳寺（天台宗）　この寺院も平川にあった。同寺は天文9年（1540）11月26日に山門派別当宣慶が勅を受けて寺号を与えられている。

これらの寺社は江戸時代初頭に大名屋敷地を確保するために移転を迫られることになる。しかし法恩寺や浄土寺は山号に平河を冠しており、故地との結びつきを表現する。天満宮においては名称そのものである。浄土寺を平川旧在と考えるのはこの点による。寺社が多数存在した点は都市との関係を前提とする必要がある。平川は商業地であることに加えて宗教的な構成要素までも持っていたことになる。

その江戸城下平川の縁辺は吉祥寺周辺であったらしい。吉祥寺の故地である千代田区大手町付近には江戸時代初頭に至るまで墓地があった。昭和29年（1954）、千代田区大手町一丁目のビル工事で2基の板碑と銅製碗が採集された。応永4年の題目板碑と永正2年もしくは6年（1505もしくは9）8月8日付けの阿弥陀一尊種子板碑である。また、東京駅八重洲北口遺跡（千代田区丸の内一丁目8）の発掘調査では慶長17年（1612）以前の10基のキリシタン墓が発掘さ

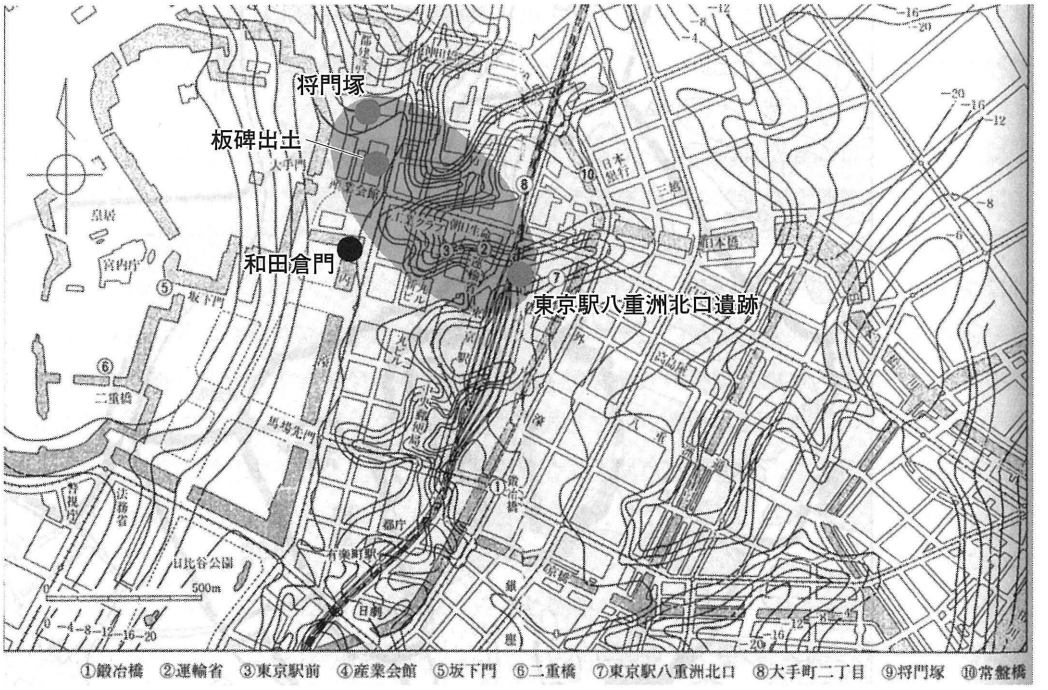


図3　丸の内周辺の基盤地と遺跡
後藤宏樹「江戸の原型と都市開発」(「国立歴史民俗博物館研究報告」118〈2004〉) 所載図に加筆

れた。いずれも墓地の存在を示している。あるいは将門塚の存在も将門伝説を切り離せば、想定される墓地群の一角であり、中世墓地の一部であったという再評価が可能であろう。

そして和田倉に旧在した吉祥寺はこの墓地群に隣接していた。曹洞宗は戦国期に葬送と関連を持つようになっている。とりわけ吉祥寺は古河公方足利義氏生母の芳春院の位牌寺であった。すなわち江戸城下である平川の縁辺にある墓地群と吉祥寺が関係すると考えておきたい。

大永4年（1524)、江戸城を接収した北条氏綱は平川の把握に務めた。この当時、平川は上下二つの地区に別れていたらしい。その下平川に代官を派遣している〔北区史310〕。

太田道灌が築いた江戸城は城下の平川とセットになっており、この構造は扇谷上杉氏さらには北条氏へと引き継がれたことになる。

3　街道と江戸城

中近世移行期の江戸の空間について、興味深い研究を行ったのは玉井哲雄（玉井1986）である。沽券図の分析から、本町通りの町割りが行われた段階では、「日本橋通りよりも本町通りのほうが主要な街路」であったとし、後に主要街路が入れ替わったと指摘する。そして「武州豊島郡江戸庄図」の分析から、この正方形の街区を特徴とする町割りは天正18年（1590）以降、

慶長８年（1603）以前に行われたと述べつつも、先行する中世江戸城から浅草に抜ける原本町通り沿いに町場があり、その存在に規定されて町割りが行われたと指摘している。つまり、中世江戸城－本町通－（常盤橋＝大橋）－浅草という街道があり、この街道に関連して中世江戸城は存在したことになる。

玉井の見解を裏付けるような屏風がある。「江戸天下祭図屏風」という、山王祭を描いた最古の屏風である（『國華』1237号　1998）。右隻右端の山王権現（現在の最高裁判所の地）から発した行列が、麹町門（半蔵門）から江戸城内に入り、吹上の紀州徳川家邸北側、本丸北側を通過し、竹橋門を経て、左隻左端の常盤橋門を出るさまを描く。画題には天守も描かれており、明暦の大火以前であることは明らかな屏風である。祭礼の行列が進む道はまさに江戸の伝統的な、かつ主要な街道であると読めるのではなかろうか。

この玉井の見解を中世文書で検証するとどうなるであろうか。まず、「江戸宿」という町の存在が気になる（北区史四八九）。天正12年（1584）３月、沼尻の合戦を前に北条家は、戦費調達として棟別銭の一部について先行徴収を命じた。その一部が「江戸宿」に負荷された。この「江戸宿」は江戸城下を示す語であるが、具体的な場所などの実態はわからない。しかし、平川の地名を使用しないことから、前代の江戸城下の平川とは異なる江戸城下「江戸宿」が成立していたと考えてもよいであろう。

ではその「江戸宿」とはどこであろうか。永禄11年（1568）12月、武田・今川・北条同盟が崩壊し、北条家は上杉謙信との同盟を模索する。同時に北条家は常総方面の守りを固める。その一環で北条氏政が下総小金領の高城胤辰に対して「江城大橋宿」に移るように命じる（北区史四二一）。「江城」（＝江戸城）が冠せられていることから、大橋宿は城下にあたる。先の「江戸宿」との相関関係は具体的には不明であるが、極めて近い関係であると考えてよいであろう。問題はその場所である。

大橋とは常盤橋の旧称にあたる。すなわち大橋宿は常盤橋門付近にあったことになる。常盤橋門の外は玉井が慶長期に町割りされたと指摘した本町通りである。「大橋宿」が常盤橋門の内外どちらであるかは不明であるが、玉井の想定した「原本町通」の先行する町場との接点であることは間違いない。

江戸城の城下は当初の平川、戦国時代後半から近世初頭の大橋宿・本町通り、そして日本橋通りへと変遷したことになる。この変化は都市江戸の膨張の様子を如実に語っている。

ではこの東西道はどのような意味を持ったのであろうか。東方向は玉井の指摘にもあるように浅草につながり、その先は隅田川を渡り房総方面に至る。いわゆる鎌倉街道下道である。では西側はどうなるか。そのヒントは先の「江戸天下祭図屏風」が与えている。まずは祭礼の西端は麹町門（半蔵門）だった点である。

そもそも麹町の地名の由来は国府に至る道＝コウジミチであるという説がある。国府はまま「コウ」と発音された。現在の麹町の地名も新宿通り（甲州街道）沿いに細長く続く。その説

を重視すれば麹町門（半蔵門）からは武蔵府中につながっていたことになる。また鎌倉街道下道であった点は、青山通りとの関係が重視される。鎌倉への接続も考えねばならない。さらに足柄峠を越えた矢倉沢往還が江戸につながっていたと論じたこともあった（齋藤2004）。足柄峠は東国の入り口であり、東海道の要衝である。すなわち、江戸の西口は武蔵府中・鎌倉・京都に向いていたことになる。

この視点に立った時、喰違門と赤坂御所内の鎌倉街道の問題にも新たな論点が生まれる。

喰違門は石垣によって固められたほかの見附とは異なり、土造りの門である。後藤宏樹（2008）によれば、小幡景憲によって慶長17年（1612）に設計された家康段階の門と指摘されている。

現在の青山通りは外苑前交差点のやや東北で、くの字に折れ曲がっている。渋谷から折れ曲がらずに直線で江戸城に向かうと赤坂御苑に至る。同所内に鎌倉街道と伝承される道筋があることを芳賀善次郎（1981）が報告している。さらに直線を延長するとこの道は喰違門に至る。

つまり、喰違門は鎌倉街道が通過する江戸城の門であり、喰違門から鎌倉街道中道と下道の分岐点である青山まで直線で結ばれていたことになる。鎌倉街道のみならず、国府路道も喰違門を通過していた可能性を後藤（2008）は指摘する。そして増上寺・青松寺ともに貝塚（四谷から赤坂付近）、すなわち喰違門付近に旧在したと伝えられるが、この伝承も喰違門付近の重要性と関連すると考えられる。喰違門の機能が赤坂門と四谷門に分散され、街道がそれぞれに付け替えらえた。喰違門が従前の機能を失ったため、増上寺・青松寺は新しい地へと移転した。このようになるのではなかろうか。両寺の移転地から考えればこの変化は日本橋の架橋にともなう大規模な都市空間の変更によって起きた事態と考えられる。

とするならば中世段階の正面は西と東のどちらだろうか。自ずから西とならざるを得ない。「江戸天下祭図屏風」において麹町門（半蔵門）を通過した祭礼行列は紀州徳川家邸北側を通過した。歴博本「江戸図屏風」は紀州邸のほかに水戸邸・尾張邸も吹上に描く。街道北側に面した北の丸の一角には駿河大納言徳川忠長邸もある。「江戸・京都絵図屏風」（東京都江戸東京博物館蔵）には半蔵門より城内に入り、東に直進する道が記載される。この道は尾張邸と水戸邸の間を通る道で、西の丸の堀端でT字路となる。御三家の屋敷は西の丸と向かい合っており、その間には大きな直線道路（大道通と呼称）がある。堀端を北の丸に向けて進むと先の祭礼の道に合流する。徳川一門がこの街道に沿って屋敷を構える。「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）に描かれる彼らの邸宅は優美であり、江戸の華やかさの一翼を担っている。およそ江戸城の周辺に屋敷を割り当てるに際して、優先して一門が割り当てられ、徳川の本拠地である江戸を荘厳する装置として位置づけられたはずである。日本橋方面を江戸の正面と考える現代的な感覚とは相違する位置、いわば裏手とイメージされる位置に彼らは屋敷を有している。日本橋を起点とする南北道を主要街道とする論理とは異なり、東西方向に江戸を貫く鎌倉街道下道を主要街道とする論理のなかで、徳川一門の屋敷が構えられていた。

天正18年（1590）、江戸城に入城した徳川家康は江戸城の修築を行う。その時に手をつけた

のは西の丸の普請であったとされている。『家忠日記』の文禄元年（1592）３月29日条にご隠居の御城の堀を担当したという記載がある。西の丸も現在は東から望むのが正面であろうが、文禄年間当時では東側にまだ日比谷の入り江がある。東西道が主であったとすれば、本丸の西側の台地続きに大きな普請があったと考えるのが自然であろう。すなわち道灌堀と呼ばれる西側を画する堀の普請であった可能性が高い。本丸の西側前面に西の丸を普請することは、西側が正面であると意識してこそ、普請の意味が理解できるのではなかろうか。「江戸図屏風」ではこの西の丸を先の徳川一門の屋敷と本丸の間に描いている。本丸、西の丸そして徳川一門という空間配置は一族の政治的位置づけに一致する。

江戸城の位置をこの様相から軍事的に評すると、江戸城は武蔵国の東端にあり、常総方面の境界を抑える城として取り立てられていたと評価できる。

ところで国立近代美術館遺跡の遺物を概観すると、調査地が中世段階のどの時期に機能していたかが推測できる。江戸氏が活躍した13世紀前半の遺物、そして15世紀の中頃から増加する遺物である。後者は太田道灌の長禄元年（1457）の江戸築城と状況が見合う。戦国期には確実に竹橋門付近に江戸城の一角があった。

この状況に先の「梅花無尽蔵」の記載の再検討を加味すると、興味深い仮説が生まれる。描写する景観は平河門から下梅林門・上梅林門を経て本丸に至る梅林坂のである。先にも触れたがこの道筋が太田道灌の江戸城の登城路と関係する可能性は頗る高い。他方、本丸西壁から吹上方面には西桔橋がある。この付近は城内でも古い時期の石垣であると指摘されている。石垣普請の状況および西側正面説の立場から考えると西桔橋は慶長11年（1606）段階での重要な登城路となる。梅林坂から西桔橋まで一本の道筋が復元できる。この梅林坂から西桔橋を結ぶ道は、現状では具体的な線として把握することができないが、鎌倉街道下道の道筋ではないだろうか。この道と中世江戸城が関連したことは間違いない。「梅花無尽蔵」の記載を重視すれば、太田道灌段階まで遡らせることが可能であろう。すなわち南向きを原則と考えれば、芳賀（1981）も指摘するように、道灌期の江戸城は鎌倉街道の北側にあったと考えることが相応しいことになる。国立近代美術館遺跡、そして北桔橋門付近は道灌期の江戸城の中心部であった可能性が生まれる。

おわりに

太田道灌期の江戸城を概観してきたが、その構造は従前の想定と大きく異なるものだったのではなかろうか。鎌倉時代以来の御家人が構えた屋敷に系譜を引く江戸城の中核部。平川の流れの南側にある江戸城と北側にある平川の城下町。江戸城と城下平川を東西に貫く鎌倉街道下道。西側を正面とする江戸。さらには喰違門の重要性。これらは失われた中世江戸の空間のわずかな記憶である。近世江戸に残された中世の残像を丹念に拾い上げれば、さらに中世江戸の

図 4　中世江戸の概念図

空間を豊かなものにできるかもしれない。

〈参考文献〉

岡野友彦『家康はなぜ江戸を選んだか』（教育出版株式会社　1999年）
菊池山哉『五百年前の東京』（東京史談会　1956年）
後藤宏樹「発掘調査からみた江戸城」（東京都江戸東京博物館研究報告第14号　2008年）
小松和博『江戸城　その歴史と構造』（名著出版　1985年）
齋藤慎一「南関東の都市と街道」（『中世東国の世界 2 南関東』高志書院　2004年）
鈴木理生「幻の江戸百年」（筑摩書房　1991年　後に、ちくま学芸文庫『江戸はこうして造られた』〔2000年〕に改題・発行）
東京国立近代美術館遺跡調査委員会『竹橋門　江戸城址北丸竹橋門地区発掘調査報告』（1991年）
芳賀善次郎『旧鎌倉街道　探索の旅』中道編　（さきたま双書　1981年）
平野明夫「太田道灌と江戸城」（東京都教育委員会「文化財の保護」21 1989年）
玉井哲雄『江戸　失われた都市空間を読む』（平凡社　1986年）
内藤昌　SD選書 4『江戸と江戸城』（鹿島出版界　1966年）
村井益男　中公新書45『江戸城　将軍家の生活』（1964年）
早稲田大学本庄校地文化財調査室編『大久保山Ⅵ』（1998年）